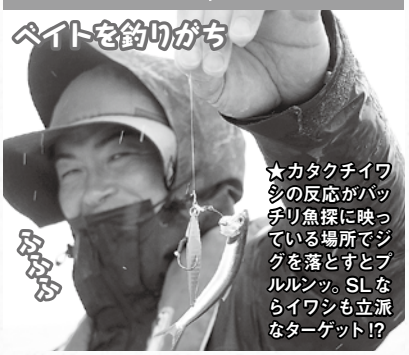
当日のルアー船で見付けた

外房のSLJで○○しがちなシーン

ベイトを釣りがち



★カタクチイワシの反応がバッチリ魚探に映っている場所でジグを落とすとプルルンッ。SLならイワシも立派なターゲット!?

ペンチを引っ掛けがち

▶ジグを投入しようとしたら隣に置いてあるペンチにフッキング。タオルを引っ掛けがちという別バーションもある

雨に背を向けがち

▶当日は雨のちみぞれ交じりの土砂降り。雨粒が顔に当たると痛いので移動中は背を向けて耐えるしかない!?

クッションが飛ばされがち

◉船が移動するたびにクッションが飛ばされる。落下地点が船内でよかった

ジグが散らかりがち

▲重さを替えたり、カラーをローテーションしているうちに、いつのまにか散乱してしまう

ジグとベイトを比べがち

▶カタクチイワシとほぼ同じサイズのジグ。ルアー釣りではマッチ・ザ・ベイトが効果的

この日の序盤、庄之助船長は徹底的にイワシの群れを追った。追いまくった。1回投入したら「すいません、イワシ抜けちゃいました。上げてください、移動します」ということもしばしばあった。ヨッシーは、そこに勝機を見出していた

「アナウンスで、ちゃんとイワシがいることが分かっていた。しかも庄之助船長はイワシが宙層にいるのか、底にいるのかまで詳しく教えてくれる。底までイワシがいるときは、大きなチャンスだと思ってたんだ。

こういうとき、ターゲットはイワシに狂っている可能性が高い。だからジグのアクションはいつもより強めにした。イワシを食っているターゲットは、波動が大きめのジグに興味を示すことが多いからね」

ヨッシーは、庄之助船長のアナウンスからもうひとつ読んでいた。それは潮の向きだ。

「おれは左ミヨシにいたけど、潮は右トモから左ミヨシに向かって流れている、ということだった。つまりおれがいたのは潮下。右舷のお客さんが落としたジグをすでに見ている魚に、口を使わせなくちゃいけない。

だったら、リアクションバイトを誘うしかない。だからそれまでの60グラムから80グラムに替えて、フォールスピードを上げたんだよ」

重めのジグに、いつもより強いシャクリを入れるヨッシー。バンブルズ TG SLJが5メートルほど底を切ったところで、ドスンッ、とアタリがきた。すかさず合わせるヨッシー。

ズシンッ……!

ヨッシーの竿が大きな弧を描いた。間違いない、大物だ!

「狙いどおりだよ! でも、引きが変だな。重さのわりにあまり引かない。ヒラメ? 掛かりどころがよくないのか……?」と、慎重にヤリトリしている。

今日のコンディションでは、これ以上ない絶好のチャンスだ。バレるな。バレるな……。だれもが寒さも雨も忘れていた。

短い時間さえ、恐ろしく長く感じられる。緊張する。ユラリ、と茶色い魚体が見えてきた。

海面を割ったのは、2.5キロの良型マハタだった。エラから下腹にかけて、ハリが掛かっている。確かに際どかった。

「やった~ッ!」

ガマンの時間が一気に打ち破られた。まさに炸裂。ヨッシーが高だかと拳を突き上げる。寒さにブルブル震えていたのと同一人物とは思えない。船全体が大きな喝采(かっさい)に包まれた。

落として、巻けば釣れる。スーパーライトなタックルで、体への負担も少ない。これがSLJの魅力だ。ハードルは低く、だれにでもチャンスがある。

だがこの日、庄之助船長とヨッシーが見せてくれたのは、的確な情報提供と、それに基づく的確な戦略が見事に合致した、ハイレベルなSLJだ。

炸裂したのは、二人のプロフェッショナリズムだった。

▲庄之助船長のアナウンスとヨッシーの戦略が見事にハマり、この1尾につながった